

教職教養課題特講 I におけるディベート実践：3 年間の実践の分析

教育心理学教室・富田英司

保健体育教室・田中雅人

目的

本学部の学生は比較的安定した友人関係を持ち、キャンパスで賑やかに会話し、授業内でもスムーズにグループワークに参加できている。その点では彼らのコミュニケーション力は高い。また、プレゼンテーションや就職面接の練習において効果的に説明できる者も多い。つまり、教員養成学部の学生は、親しい者との日常会話やフォーマル場面での一方的伝達については、既にある程度スキルを持っている。しかし、その2つの間にあるような場面ではその限りではない。例えば、知人や教員、学校関係者等との打合せや世間話、ゼミ等での議論等において、彼らは適切な談話ジャンルや非言語的行動を活用できず、ぎこちない会話になりがちであり、意見交換や合意形成、問題解決をおこなうことが難しい。

このような比較的公の場でインタラクティブに話し合いをする言語的能力や行動レパトリーの獲得は一朝一夕に獲得されるものではなく、大学入学直後から長期にわたって友人達と議論を重ねて初めて身につくものである。

そこで、教職教養課題特講 I では日頃の議論活動の促進に少しでも寄与できるよう、一昨年度よりコミュニケーションの実践的な訓練の場を半分程度設けている。本報告は、その授業改善の過程を報告する。

授業の概要

対象授業 「教職教養課題特講 I」は2年次の後学期に受講することが想定されている。平成23年度は、履修登録した113名のうち、アンケート回答者は97名。平成24年度については、履修した123名のうち、アンケート回答者は106名。平成24年度については、履修した101名のうち、アンケート回答者は78名(平成26年2月28日現在)。担当者は保健体育教室の

田中雅人教授と教育心理学教室の富田英司准教授の2名であった。

教科書 『大学1年生からのコミュニケーション入門』中野美香著 ナカニシヤ出版

授業スケジュール 第1回授業の前半はオリエンテーションをおこなった。第2回授業の後半から第3回に教科書を使って、ディベートの方法について実習を織り交ぜながら、解説をおこなった。第3回では、最初の試合に取り組んだ。その後、第4回、第7回、第10回、第12回、第14回、第15回は試合を中心として、必要なインストラクションを授業の最初におこなった。最初の方と最後の階では、ICレコーダーによって発声した内容が記録された。

授業時間外に実施する課題のほとんどの提出先や教科書以外の資料を保存する場所として、ムードルを利用した。

授業評価 最後の授業において記名式の振り返りアンケートを実施した。その項目は多岐にわたっており、本報告書ではその一部のみの報告とする。

授業の改善点 本授業では昨年度と比較して次のような改善を試みた。まず昨年度の要望として、ディベートの手本やモデルを見たいというものがあった。そこで、前年度の授業の最後におこなった試合をビデオに撮影したものを、今年度の受講生のための1つの事例として活用した(第1回の授業)。この試合は、他の受講生全員を前にして、4つのチームが合計2回おこなったものである。また、議論の進め方を説明するために、学生の立論や反駁を書き起こしたものを配布し、それらを見ながら、どのように議論の展開を考えればよいかということも授業内で検討した。

なお、昨年度改善した次の点については今年度も継続している：(1) 主張を組み立てる練習を増やした、(2) 教科書の初歩的な部分(主張と反論)について、前年度よりも説明を丁寧におこなった、(3)

学生からの質問等に応じて、同じ内容であっても複数回説明した、(4) 時間外学習を大幅に増やした：オンラインあるいは対面式でのディベートを必ず毎週おこなうようにした。(5) 学生がディベートの論題を自分たちで選ぶ機会を増やした。

### 結果と考察

**全体的な結果** 前年度や2年前の実施と比較して顕著な違いはみられなかった。このことは昨年度との報告と同じである。そのため、今回の報告では、授業を通じてディベートのイメージが変わったかどうか、そしてその変化の理由は何であったかを全体的に検討することとした。

**ディベートのイメージ** ディベートを始める前と比較してイメージがよくなったか尋ねたところ、平成23年度については97名のうち、79名がよくなった、18名がよくなっていないと回答した。平成24年度については106名のうち、91名がよくなった、15名がよくなっていないと回答した。平成25年度については76人のうち、65名がよくなった、11名がよくなっていないと回答した。これらのことから、授業改善がディベートのイメージの改善という顕著な効果は見られていない。

**イメージが変化した理由** 表1には、過去3年間の授業を通して、ディベートのイメージが良くなった、あるいは変わっていない理由としてどの程度それぞれの項目が当てはまるか評定したものである。上半分は良くなった理由に対する評定値を、下半分は変化しなかったもしくは悪くなった理由に対する評定値を示している。上下それぞれについて、上から平成23年(2011年)度の平均と標準偏差、平成24年(2012年)度の平均と標準偏差、上から平成25年(2013年)度の平均と標準偏差が示されている。また、平均値については値が大きいほど赤色が濃くなるように、そして値が小さいほど緑色が濃くなるように着色している。

これらを見て分かるように、ここでも年度を重ねることによる変化というよりも安定性のほうが見て取れる。イメージが良くなった学生はやってみてできるようになったこと、異なる意見を知る事、知識を深めていく点が寄与している。他方、よくなっていない学生はやってみて難しいという経験にその原因をより強く帰属させている。

これらのことから、学生が難しいと感じている領域の特定とその領域の学習内容の難易度設定が授業改善のもっとも重要な課題となると思われる。

表1 過去3回の授業でディベートのイメージが変化した方向とその理由

	ディベートの授業がわかりやすくなったから	ディベートが以前よりもできるようになったから	ディベートをやってみたら簡単・難しかったから	友達と一緒に活動するのが楽しかったから	意見のよさを競うことが楽しかったから	情報収集や原稿作成などの準備が楽しかったから	話すことが楽しかったから	自分の主張をすることが楽しかったから	相手に反論・質問されるのが楽しかったから	自分とは異なる意見を知るのが楽しかったから	議題について知識を得るのが楽しかったから	
良くなった	2011mean	3.43	4.13	2.35	3.53	3.57	2.76	3.61	3.47	3.01	4.52	4.34
	2011sd	0.73	0.65	0.91	0.94	0.92	0.80	0.81	0.83	0.79	0.64	0.55
	2012mean	3.57	4.08	2.79	3.82	3.77	3.03	3.78	3.77	3.23	4.45	4.16
	2012sd	0.73	0.64	0.89	0.81	0.73	0.77	0.81	0.79	0.83	0.67	0.78
	2013mean	3.52	3.97	2.35	3.62	3.56	3.12	3.58	3.68	3.20	4.40	4.18
	2013sd	0.90	0.83	0.96	0.84	0.94	0.99	0.88	0.85	0.97	0.81	0.79
変化なし	2011mean	2.44	2.78	3.83	2.11	2.72	2.67	2.39	2.72	2.11	1.72	1.94
	2011sd	0.92	1.26	1.29	1.02	1.18	1.24	1.20	1.13	1.02	0.75	0.80
	2012mean	2.47	2.53	3.27	2.27	3.00	3.00	2.40	2.47	2.20	1.93	2.20
	2012sd	0.92	0.83	1.39	1.22	1.20	0.93	1.30	1.25	0.94	0.70	0.86
	2013mean	2.45	2.55	3.91	2.00	2.73	2.27	1.73	2.18	2.45	1.70	1.45
	2013sd	1.21	1.04	1.22	0.89	1.35	1.01	0.79	1.08	1.13	0.67	0.69